

ISSN 2078-7359

多元文化交流

東海大學日本語文學系

二〇一二年

第四號



東海大學日本語文學系



ISSN 2078735-9



<特集:台湾で考える日本文学教育>

日本／国民国家論／台湾

——国民国家論の日本語教育への導入に関する一考察——

神祐一

要旨

「国民国家」の構造や機能、歴史的形成のありよう等を明らかにしつつ、その「解体」「乗り越え」をも模索する実践としての「国民国家論」が、一九九〇年代以降の日本の知識人界において一定の位置づけを得ていることは、日本に関わる研究を行なっているものにとって、周知の事実だろう。本論が行なうのは、この「国民国家論」を台湾の日本文学教育に導入することをめぐっての考察である。その導入が、台湾という空間内において、どのような意味をもつのか、どのように機能するのか。そして、そのことが台湾において持つ意味や機能をふまえた時、「国民国家論」を台湾の日本文学教育に導入するという行為をどのようなものとして評価するのか。本論では、「台湾」ナショナリズムや「抵抗のナショナリズム」といった領域に焦点を当てる形で考察を行ないつつ、以上のような問いに答えを出していくことにしたい。

キーワード: 日本文学教育,台湾ナショナリズム,抵抗のナショナリズム,台湾文学,国民国家論

はじめに——台湾高等教育の日本語学科における日本文学教育の現状——

台湾の高等教育機関における日本語教育の中での日本文学教育の存在意義をどのように考えるか。この問いは、《現在の台湾の日本語教育の中に日本文学教育が存在している》という前提があってこそ成立するものだが、実のところ、現在の台湾においてこのような前提は崩れつつあるとあってよい。

台湾では、一九九〇年代後半から二〇〇〇年代前半にかけて多くの日本語を専門の核とする学科(以下、「日本語学科」と略)が設立されたわけだが、それらの多くは、伝統的な①「日

本語文学系」とはコンセプトを異にする、「応用」という名を関した日本語学科である。日本語習得機関というだけでなく、日本語学や日本文学の研究機関としての性格をも強く持つ「日本語文学系」に対して、「社会との連続性を強く意識」し、「より〈実用性〉を伴った」「職業訓練機関」としての「日本語のトレーニングセンター」たることをコンセプトの核とした「応用」系の日本語学科においては[南台科技大学応用日語系(所) 2008:p.1-2]¹、「非実用的」とみなされがちな「日本文学」系科目の設置は当然視されていない。応用系の日本語学科の一列である②「応用日語学系」の場合(応用外語学系日語組等も含める)、同じ一般大学系の日本語学科であるということもあってか、「日本語文学系」より数は少ないにしろ、そのほとんどにおいて「日本文学」系の科目は設置されているのであるが、技職系大学に設置されることが多い③「応用日語系」(応用外語系日文組等も含める)においては、「日本文学」系の科目が設置されていない例の方が多い²。

[財団法人交流協会 2009]を主な資料として調査したところ、現在の台湾には四五の日本語学科が設置されており、その内訳は、①「日本語文学系」系列の学科:14、②「応用日語学系」系列の学科:13、③「応用日語系」系列の学科:18。そして、各学科の website で公表されている最新のカリキュラム(「課程規劃」)を対象として、「日本文学」系科目の設置状況を調査したところ、①:全て設置、②:設置なし2、③:設置なし10という結果を得たのだが³、この結果が示すように、「応用日語系」の日本語学科では、その半分以上において「日本文学」系の授業は設置されていないのである⁴。

-
- 1 「応用」系日本語学科の性格を明確に規定しようとしている先行研究として、[林 1997]、[蔡 2001]等も参照。
 - 2 なお、注1に挙げた[蔡 2001]は、②と③を一「応用日語(学)系」とひとまとめにした上で、「日本文学を省いた日本語だけの、そしてそれを」「実社会」に「生かす」ことを目標にしたものと定義づけている。しかし、学科における日本文学の位置づけという部分に焦点を当てるならば、大きな差異は、むしろ①②(一般大学系日本語学科)と③(技職大学系日本語学科)の間にあり、③こそが、蔡の言う「応用」系日本語学科のあり方を文字通り実現したものであることが、見えてくるだろう。
 - 3 「文学」を名称に入れている科目(「日本文学史」「日本古典／近代文学」「日本文学概論」等)、日本における特定の文学ジャンルを名称に入れている科目(「日本近代小説」「日本近代詩歌選読」「日本戯劇」等)、並びに「日本名著選読」系統の科目を、「日本文学」関連の科目とみなし、調査を行なった。
 - 4 筆者の勤務する学科(南台科技大学応用日語系〔所〕)の大学評価に関わる形で耳にした情報であり、裏を取っていないので、推測の形でしか言えないのだが、このような状況には、台湾の教育部による大学評価の問題が関わっているのではないかとと思われる(すなわち、技職系大学の日本語学科≠「応用日語系」に「日本文学」関連の科目を設置することは、大学評価の際に必ずしもプラス評価されない、という事情)。

従って、「日本語で書かれた文学作品を読むことが、〈教養〉的な価値だけでなく、日本語能力の向上に役立つ、あるいは日本文化の理解に寄与する、という〈実用〉の範疇で捉えられている」(本「特集の趣旨」)といった認識さえもが成立しえないような事態が訪れているということを、台湾の高等教育機関における日本語教育の現状として、まずは把握しておく必要がある。

そして、このような現状把握をふまえた時、日本語教育に関わる者は、「日本語教育において日本文学教育はどのような意義を持ちうるのか」という問いではなく、「日本語教育」と「日本文学教育」——一般化して言えば「(第二)言語教育」と「文学教育」——をそもそも関連づける必然性があるのか、というより根本的な問いに出会うことになるだろう(例えば、我々が第二言語を学ぶ際の様々なあり方を思い返せばすぐにわかるように、その言語による「文学」を学ぶこととはいっさい関係なく、第二言語を学ぶというケースは普通にありうる)。この問いを抜きにして、「日本語教育において日本文学教育はどのような意義を持ちうるのか」という問いを発することは、本特集が焦点の一つにしようとしているであろう《国民国家—ナショナル・ランゲージ—ナショナル—リテラチャー》のトリアーデに沿った思考の枠組みをその根本のところまで温存することでもある、ということを考えるならば、「日本語教育」と「日本文学教育」をそもそも関連づける必然性があるのか、という問いを立てることも重要ではないか、と最初に提言を行なっておきたい。

さて、本論でこれから行なうとすることなのだが、実は本論では、今述べたような根本的な問い、すなわち、「日本語教育」と「日本文学教育」をそもそも関連づける必然性があるのか(もしあるとすれば、どのような必然性があるのか)という問いに答えていく作業を行なうわけではない。この問いに答えるためには、第二言語教育研究で積み重ねられてきた「文学教育」の意義に関する考察、さらには、日本の「国語」科教育論の中で積み重ねられてきた「文学教育」に関する考察⁵などをふまえる必要があるわけだが、筆者にはそれらに関する蓄積が欠けているからである。

5 [浜本 2001]が行なった、戦後日本の「国語」科における「文学教育」(理論)史の整理をふまえるならば、日本の「国語科」教育において、「国語科」教育における「文学教育」の位置づけ、或いは、「言語教育」と「文学教育」の関係が、常に大きな論点になってきたことがわかる。

さしあたり、現在の私に出来るのは、現在、台湾の日本語系学科(の一部)において日本語教育に日本文学教育が組み込まれているということ、とりあえずの「現状」として認めた上で、その「現状」がどうあるのか、或いは、どうあるべきなのか、を考察することである。そのような試みとして、本論では、(管見の限り、これまで試みられたことがないと思われる)台湾の日本語教育の中の日本文学教育にいわゆる「国民国家論」的な知的実践を導入することに関する考察を行なってみることにしようと思う。

2. 「国民国家論」と日本文学教育

本「特集の趣旨」では「冷戦の終結やグローバリゼーションの進展によって、「国家」や「ナショナリティ」の相対化が(少なくともアカデミアでは)自明のこととして行われている」という現状認識が示されているが、その現状認識を、「日本」の知識人界の状況に焦点を当てる形で言い直すならば、「国民国家論」と呼ばれる知的実践の一般化ということになるだろう⁶。正確に言うならば、「国民国家論」とは、明確な学問領域ではなく、一定の傾向を持つ様々な知的実践をゆるやかにまとめるレッテルと言うべきものである。ただ、以下の論述の都合上、その内実を明確化しておくならば、「国民国家の仕組みや機能を明らかにしてその歴史的变化をたどる」と同時に「それをいかに乗り越えるかという問いを含む」知的実践[西川 1998:p.288]、或いは、「国民国家によるシステム統合」によって「規律化」された「身体」、「形成」された「日常的意識」、「内容を規定」された「言語コミュニケーション」などを批判的に吟味することにより、「国民国家へのシステム統合」を「超えてゆく可能性」を模索しようとする知的実践[酒井他 1996:p.4]といったものになるろう⁷。

6 ここで「日本」に限定するのは、以下に述べるような「国民国家論」的な知的実践の一般化が世界的なものと言えるかどうかの検証を筆者は行っていないからである。この点に関わる注目すべき発言が行なわれているものとして、[萱野 2011:p.9-12]を挙げておく。

7 この「国民国家論」の成果としては、〈肯定しうるナショナリズム／否定すべきナショナリズム〉といった従来の腑分けをいったん白紙にしつつ、ナショナリズム一般の性格を明らかにしたこと(特にナショナリズムが構造的に孕み持つ、他者の排除の構造を明確化したこと)、ナショナル・リテラチャーやナショナル・ヒストリー、ナショナル・カルチャーといった一見非政治的に見える領域が「国民国家」形成に深く関わっていることを明らかにしたこと、等が挙げられる。

この「国民国家論」は、マクロなレベルでは、冷戦の終結やグローバリゼーションの進展、EC（欧州共同体）の成立（1922年）などに伴う「国民国家」という形態の揺らぎに対する知的対応として、ミクロな（「日本」国内）レベルでは、「新しい教科書を作る会」（1996年12月結成）を軸とするネオ・ナショナリズムへの対抗実践的な性格を強く有するものとして、日本の知識人界に普及し、本「特集の趣旨」で述べられている如く、「自明」と呼べる程の地位を得ることになった。

本「特集」は、まさにそのような状況をふまえて、「『日本語による文学』教育の役割と、それが存在する意味の問い直し」がなされるべきだとするわけであるが、この点に関して筆者も基本的には同意見であり、付け加えれば、同様な「問い直し」は、日本国内の「国語」科教育における「国文学（日本文学）」教育、或いは、大学における「国文学（日本文学）」系の授業に対しても行なわれるべきだと思われる。

ただその上で、あらためて考えてみたいのは、「日本」という空間（正確に言えば「日本」の知識人界）においては「自明」となった「国民国家論」という知的実践を台湾の日本語教育の中の日本文学教育に導入することが、台湾という空間内において、どのような意味を持つのか、また、どのように機能するのか、ということである。

現在、台湾の日本語学科の日本語教育の中の日本語文学教育において「国民国家論」的な知的実践が一般的に導入されているわけではなく、むしろ、そのような例は全体の中で考えれば少数であることが予想されるので⁸、この問いは、「現状」に対する把握や分析というよりは、「もし導入したらどうなるのか」という思考実験的なものとして設定されるものなのだが、この問いは、本「特集の趣旨」が設定した、「『日本文学』というものが日本という国民国家の枠組みを支える一つの装置である」とすれば、「日本文学教育」が、各国の「日本語教育」の教育課程の一つとして機能することが、その国や地域で、どのような意味を持つのか」という問いを、私の問題意識に沿う形に作り変えたものでもある。

では、「国民国家論」という知的実践を台湾の日本語教育の中の日本文学教育に導入することは、台湾という空間においてどのような意味を持ち、どのように機能することになるのか。

8 そのような実践例が示されたものとして、[内田 2004]、[笹沼 2011]を挙げておく。

先に、西川長夫の言葉を借りて、「国民国家論」を①「国民国家の仕組みや機能を明らかにしてその歴史的变化をたどる」と同時に②「それをいかに乗り越えるかという問いを含む」知的実践ととらえておいたわけだが、この発言から伺えるように、「国民国家論」とは、単に国民国家を対象化し、その有り様を明らかにしようとするというだけではなく(①)、「国民国家」を「乗り越える」べきもの、解体すべきもの——そしてその意味でいわば「否定」⁹的な対象——として位置づけようとする志向性を孕む(②)¹⁰ものである。

これを「日本文学」研究或いは教育という場に持ち込んだ場合、「日本文学」や「日本文化」等が「乗り越える」べき否定的な対象として措定されることになるわけであり、そのことは、台湾の日本語教育の中の日本文学教育で同様の試みを行なった場合においても同様であろう。

そして、ここで見逃してはならないのは、台湾という空間内で台湾の学生を対象として上記のような実践を行なった場合、「乗り越える」べき否定的な対象として措定されるのは、「日本」や「日本文学」「日本文化」だけとはなくなるということだ。言うまでもないだろうが、「国民国家論」的な実践が対象とするのは、「日本」という国民国家のみではなく、国民国家一般なのであり、その実践は当然、別の「国民国家」にも差し向けられる。従って、「国民国家論」という知的実践を、台湾の日本語教育の中の日本文学教育に導入するということは、台湾という空間内において、「台湾」や「台湾文学」「台湾文化」をも「乗り越えるべき」否定的な対象として措定することであり、(享受者の意図には関わらず)そのような志向性を持ちうるよう、台湾の学生たちを「教育」しようとするものとして結果的に「機能する」ことになるのである。

9 一方に想定された理想的な対象・状態(非A)との対比において、或る対象・状態(A)の存在「全体」をマイナス化しようとする(そして、理想的な対象・状態たる非Aに移行していこうとする)ようなあり方を、本論では、Aへの「否定」と呼ぶことにする(補足しておけば、この場合、理想的な対象・状態たる非Aは、具体的な内容を持つものとして措定されている必要はなく、〈空白〉のまま措定されているような場合もありうる)。

それに対し、一方に理想的な対象・状態(非A)を想定しつつも、それとの対比において、或る対象・状態(A)の存在「全体」をマイナス化することはせず、その存在をとりあえずは認める。その上で、前者との対比において見えてくるAのマイナス点を問題化し、修正していこうとするようなあり方を、本論では、Aへの「批判」と呼ぶことにしたい。

10 このことは、以下のような「国民国家論」の代表的な著作の題名を見ても伺えるだろう。例:『地球時代の民族=文化理論—脱「国民文化」のために』[西川 1995]、『増補 国境の越え方—国民国家論序説—』[西川:2001]、『ナショナル리티の脱構築』[酒井他 1996]、『ナショナル・ヒストリーを超えて』[小森他 1998]、『岩波講座文学 13 ネイションを超えて』[小森他 2003]。

さて、ここで次の問い、すなわち、〈そのことをどのように考えたらよいのか〉という新たな問いが生じることになるだろう。

この問いに対して、ありうる答えの一つは、「それで問題ない」というものだろう。「常識的にいえば、自己のナショナリズムを守ろうとするのなら、他者のナショナリズムも守らなければならない。また、他者のナショナリズムを批判するのなら、自己のナショナリズムを前提としなければならない。日本ナショナリズムは批判するが、自己のナショナリズム、たとえば朝鮮ナショナリズムは批判しないという態度は、あきらかに矛盾するのではないか」[李 2006:p.167]という李建志の発言にそのような立場は明確に現れているが、先に述べたように、「国民国家論」的な実践が対象とするのは、国民国家一般なのであり、どのようなナショナリズムであっても否定的な側面(他者の排除など)を構造的に有することを明確化したことがその大きな成果であったことをも考えれば、現在の台湾におけるナショナリズムをも乗り越えるべき否定的な対象と位置づけるべきだとする立場は、当然ありうるだろう¹¹。

そして、もう一つのありうる立場は、「国民国家論」的な知的実践は果たしてどの対象に対しても一律に適用しうるものなのか、本論の文脈に即してより具体的に言えば、「日本」や「日本文学」「日本文化」に対するのと同様に、「台湾」や「台湾文学」「台湾文化」に文字通り適用するのは適切なことなのか、両者を、乗り越えるべき否定的な対象として単純に共通視することは果たして適切なのか、といった問いをあらたに設置しようとする立場である。

これは、「国民国家論」を文字通り推し進める方向においては無効化されてしまう〈肯定しうるナショナリズム／否定すべきナショナリズム〉という区別の可能性をあらためて考え直してみようということでもある。以下、本論はこの後者の立場を採用しつつ、さらに考察を進めていこうと思う。

3. 「台湾」ナショナリズム

「国民国家論」という知的実践を、台湾の日本語教育の中の日本文学教育に導入した場合、結果的に、乗り越えるべき否定的な対象としての位置に置かれてしまうことになる。「台湾」

11 例えば、「国民国家論」の理論的支柱と位置づけられる西川長夫は、このような立場にあると言えるだろう。

や「台湾文学」「台湾文化」とは、いったいいかなるものとしてあるのか。また、以上全てに関わるものとしての「台湾」ナショナリズムは、いったいいかなるものとしてあるのか。まずは、そのことを、先行研究を参照しつつ、明確化しておくことにしたい¹²。

ここでは、B・アンダーソンによる「国民」の定義[Anderson 1983:p.18-19]を借りて、「台湾」ナショナリズムを《「中華民国」が実効統治する地域(=「台湾」¹³)の住民に限定される形で想像された政治共同体を構築しようとする志向性」と定義しておくが、先行研究によれば、このような「台湾」ナショナリズムは、①「日本植民地統治化に形成された「台湾大」の社会統合を背景とした抗日ナショナリズム」[若林 2008:p.269]という形で登場、②二・二八事件(1947年)を大きなきっかけとしつつ、国民党政府・外省人への対抗的な性格を持つエスノ・ナショナリズム[何 2003:p.306-307]として再形成、その後、③国民党独裁政権下の政治社会体制に抗する民主化運動に伴う形で一九八〇年代以降、徐々にその存在感を確固たるものにしていきつつ、最終的には、台湾における「準公定ナショナリズムの地位に上昇」[若林 2008:p.21]するに至る、といった形で展開されていったとされる。

一口に「台湾」ナショナリズムといっても、以上のようにその出現や存在の様態は一様ではない。その全ての内実に関して精密な記述を行なうのは、本論の目的からはずれるし、またそもそも、それを行なうだけの能力・知識が筆者には欠けているため、ここでは、現在の「台湾」ナショナリズムに直接連なる③の局面におけるナショナリズムに焦点を当てることにし、本論の問題意識に関わってくる、注目すべきポイントを指摘しておくことにしよう。

まず第一点目として指摘しておきたいのは——これは①や②についても言えることだが——、「台湾」ナショナリズムというものが、ある政治社会体制において何らかの抑圧を受けた者たちによる(その政治社会体制への)「抵抗」という形で生じたものだ、ということ、すなわち、いわゆる「抵抗のナショナリズム」の性格を帯びたものだということである。すなわち、①においては日本植民地統治への抵抗、②③においては、国民党独裁政権下の政治社会体制への抵抗であり、

12 「台湾」ナショナリズムに関する先行研究としては、主に[若林 1986][若林 1992][若林 2008][何 2003][丸川 2011][河添 2004][本田 2010][吉田 2005]を参照した

13 正確には、台湾島、澎湖諸島、馬祖、金門、その他の周辺諸島を含めた地域。

そのような社会政治体制を変革しようとするものとして「台湾」ナショナリズムがあったということである¹⁴。

次に第二点目として指摘したいのは、一点目の指摘とも連動することであるが、「台湾」ナショナリズム(③)が、国民党独裁政権下の「中華民国」の政治体制を改革し、民主化しようとする動きと切り離せないものであり、しばしば「下からの」という形容を伴って呼称されるいわゆる「民主化ナショナリズム」としての性格を有するものであったということである。すなわち、「台湾」住民を基礎とする選挙制度を拡充することが民主化の目的となるなら、それは必然的に大陸による統治を前提としていた社会制度を、台湾自らの手で整える＝「台湾化」することにつながり[丸川 2010:p.152]るわけであり、この意味において、「台湾」ナショナリズムは「中華民国」の民主化を推し進める必須の動力として機能するものであったと言える。そしてまた、現在においても、民主化された台湾(＝「中華民国在台湾」)を支える動力として機能していると言えるのである。

以上の二点は、「台湾」をめぐる研究では常識となっているような事柄であるが、現在までの「台湾」ナショナリズムの性格という点においては、ぜひとも押さえておかなければならないポイントである。そして、以上をふまえて言えるのは、「台湾」ナショナリズムが、民主化の動力となった(そして現在もその動力として機能している)という点において、また、若林の言う「準公定ナショナリズム」として現在の台湾(「中華民国」)という政治共同体を支える原理として機能している、といった点において、現在の台湾という空間においては「肯定的な」位置づけを与えられている、ということである。

ところで、「台湾」ナショナリズムと「民主化」によって出現した政治共同体としての「台湾」(＝「中華民国在台湾」)の歴史は、実質的に言えば、未だ三十年にも満たないものであり、それは未だ形成途上にあると言える。このことに関わって、さらに指摘しておきたいのが、「台湾」という国民国家の不安定性——言い換えれば、「台湾」というナショナル・アイデンティティの不安定性——という問題である。

14 国民党独裁政権による政治体制が変革され、「民主化」が成立した以降について言えば、台湾をその版図の一部とする立場をとる中華人民共和国、並びに、その立場に同調する国々への「抵抗」(＝正確に言えば、中華人民共和国に対して、自分たちがあくまでも別の政治共同体であるという立場をとるという意味での「抵抗」)として、「台湾」ナショナリズムは機能していることになるだろう。

これは、二・二八事件を決定的な要因として定着したとされる「外省人」対「本省人」という「戦後台湾社会の最大の社会的な亀裂」[若林 2008:p.49](いわゆる「省籍矛盾」)¹⁵をも含めた、台湾の多エスニック(「族群」)社会的な性格を主な原因とするものである。仮に「民主化」によって台湾という空間に居住する住民を成員とする政治共同体＝選挙共同体が形作られたとしても、その政治共同体＝選挙共同体の内に深刻な分裂があり、それが一つの「国民」として形成されていなければ、「台湾」という国民国家の安定した存在は望めない。

そのような問題を解決するために登場したのが、「本日、この土地で共に成長し、生きてきたわれわれは、先住民はもちろん、数百年前あるいは数十年前に来たかを問わず、すべてが台湾人であり、同時にすべてが台湾の真の主人であります」[李 1998]といった形で語られる、いわゆる「新台湾人」論であり、また、「現在の台湾には少なくとも原住民族各族、閩南人(福佬人)、客家人と「外省人」が存在する。彼らは等しく「台湾人」の主体を構成し、今まさに融合が進みつつある。かれらの間には所謂優劣・高低、中心・周辺の別、あるいは主流と地方の別があってはならず、いわんや「省籍問題」があってはならない」[民主進歩党政策白皮書編纂工作小組 1993:p.79]といった形で語られる多文化多民族主義的な言説、いわゆる「四大族群」論である¹⁶。

一九九六年の「中華民國憲法」第四次改憲の際、憲法「増修条文」第十条第九項に「国家は多元文化を認め、原住民族の言語と文化を積極的に擁護する」[中華民國憲法]という条文が記され[若林 2008:p.303](なお、現在は第十条第一一項の位置に置かれている)、また、一九九四年十月に改定公布された『国民中学課程標準』に基づいて製作され、一九九七年より使用されることになった台湾の国民中学教科書『認識台湾』においても「四大族群」論的な語りがその基本軸の一つとして取り入れられたこと[山崎 2009:p.197-199]などからもわかるように¹⁷、特に「四大族群」論的な多文化多民族主義については、いわば台湾の国策たる地位を得て、教

15 「省籍矛盾」については、主に[何 2003:第四・五章][若林 2008:p.49-51]を参照。

16 「新台湾人」論と「四大族群」論については、[王 2003][若林 2003][若林 2008:第六・七章][山崎 2009:第 5 章]等を参照。

17 そのような語りの一例を挙げておく。「本書の主旨は生徒に各エスニックグループの先人による台湾開発の史実を認識させ、団結協力の精神と、愛郷愛国の情操、世界観を具えた抱負を養うよう指導すること、そして生徒の台湾文化資産に対する理解を強化し、それを大切に守ることを知らせることにある」[国立編訳館 1997]([『認識台湾(歴史編)』[編集大意])。

育を含む様々な社会制度もその線に沿って整備されつつある。ただ、以上のような試みは、未だ上手く機能しているとは言えず、

今日の台湾社会には、福佬ショーヴィニズム…が瀰漫しており、まず客家人に対する排斥が、さらには外省人に対する排斥があるために、全体的な台湾アイデンティティは、もとより結集のしようがなく、台湾意識もまた形成しえないのである。教科書で『台湾意識』がすでに形成されているなどということは妥当ではない。いまのところ、そのようなものは存在していないからである。[周明德 1997:p.18-19] ※発言は尹章義によるもの。

「多元」、「開放」與「包容」是課本上再三強調的台灣社會文化特徵；全球文化超級市場上的認同建構元素是自由的選取。然而、我們並不能就此沉醉多元、自由等詞彙所榮造出的美好意境中、反而更應省思、在多元的背後所暗藏的是台灣文化主體的空洞化、不明確的文化主體使台灣社會欠缺能[多+句]凝聚民眾認同的基礎。[李天鐸・何慧雯 2003:p.36]

現段階の「新台湾人意識」は、実は空白の主体であり、「自性」を欠いているため、単なるひとつの「記号」(sign)として、しばしば異なる立場のものによって異なる内容を注入されがちである。[黄 2008:p.27]

といった語りが台湾社会において存在していることから伺えるように、また、「選挙のたびに」前面化する「族群カテゴリーの政治化」[若林 2003:p.152](いわゆる「族群投票」という現象などからも伺えるように、台湾という空間において、一つの「国民」として「台湾」人(「われわれ台湾人」というものは、未だ不安定な状態にある。

現在の台湾という空間において、それは、未だ「自明」なものではなく、むしろ、これから獲得すべき目標として位置づけられているということ——そしてその点において、一つの「国民」としての統合がとりあえずは完成していると言える日本とは事情が異なるということ¹⁸——を現在の「台湾」ナショナリズムの三つ目の特徴として確認しておくことにしたい¹⁹。

18 なお、ここで言うところの「国民」統合の完成とは、一つの均質的な「国民」が実体的に存在するようになった、ということではない。一つの「国民」というものは、あくまでも「想像」の水準において存在する

さて、以上のような「台湾」ナショナリズムのあり方をふまえるならば、「台湾文学」「台湾文化」といったものの、台湾という空間における位置づけも見えてくるだろう。

既に述べたように、「国民国家論」は、ナショナル・ヒストリー、ナショナル・リテラチャー、ナショナル・カルチャーといったものが「国民」形成のための重要な装置であることを明らかにしてきたわけであるが(だからこそ、「国民国家論」においては、それらも乗り越えられるべき否定的な対象として措定されることになる)、「台湾」ナショナリズムと連動した民主化が完成していく一九九〇年代以降から数を増し始め、アカデミックな形で制度化されていくことになる「台湾」関連の学問領域(「台湾文学」「台湾史」研究等)の形成過程を観察してみるならば、それらが単なる新しい学問領域の創出という観点のみでとらえられるものではなく——すなわち、純粋にアカデミックな世界の中での出来事としてとらえられるのではなく——、明確な「台湾」ナショナリズムの志向のもとに形成されてきたものでもあること、すなわち、それらが、「台湾」というナショナル・アイデンティティを形成する装置たることをまさに自覚しつつ形成されてきたということは、容易に見て取れるだろう。

ここでは、本論に最も関係が深い「台湾文学」のみに焦点を当てることにするが、例えば、一九九五年、台湾筆会・台湾教授協会・文学台湾雑誌社・台湾客家公共事務協会を含む十八の文化団体によって行なわれた「台湾文学系」設置要求の動きの中でなされた「台湾近五十年來、在國民黨統治下、大學裏竟然祇知道研究別人文學、卻不研究自己的文學、甚至祇知道中國的歷史、卻不知道自己台灣黨的歷史」[彭 1995:p.37-38]という発言を見るならば、「台湾

ものであり、それが実は雑多な属性を持つ人々の集まりに過ぎないということは、これまでB・アンダーソン[Anderson1983]や「国民国家論」(例えば[西川 2001])によって既に明らかにされている(その他、同様な試みを行なっているものとして[小坂井 2002]も挙げておく)。

「国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことを忘れていくことである」と述べ、「忘却、歴史的誤謬」こそが「国民の創造の本質的因子」だとした E・ルナンに従うならば[Renan 1882:p.45-49]、ここで言うところの「国民」統合の完成とは、ルナンの意味での「忘却」がとりあえず十全に機能していると言いうような状態のことであり、その結果として、「多くの事柄を共有」する一つの「国民」が存在している(かのような)幻想が成立している状態のことを指す(ちなみに、これをふまえて言えば、「国民国家論」とは、この「国民」化に伴う「忘却」をあらためて「思い出そう」とする知的実践ととらえることが出来るだろう)。

そして、現在の台湾は、「四大族群論」的な多文化多民族主義の採用という形において、「忘却」を出来るだけしない形での「国民」統合という困難な道を模索している、と見ることが出来る。

- 19 断っておくが、以上は、あくまでも台湾という空間における「台湾」ナショナリズムの位置づけを大づかみに述べたものであって、台湾において「台湾」ナショナリズムへの批判は存在しない、ということを言いたいわけではない。そのような批判の一例として、[陳:1994]を挙げておく。

文学」系の設置が、「台湾」人たる「われわれ(「自己」)」の形成と関連付けられていることは明らかであろう(ちなみに、この動きに関わる発言群がまとめられている書物([羊 2011])の名称は『台湾の主體的建構—台湾文學系的誕生—』であり、「台湾文學」系の設置がまさに「台湾の主體」を構築することでもある、と認識されていることが、より明確に示されている)。

また、このような動きの下、一九九七年、真理大学にはじめての「台湾文学」系が設立されたのを皮切りにして、以降、少しずつ「台湾文学」系は数を増やしていくことになるのだが²⁰、それら実際に設立された「台湾文学」系も、「台湾」ナショナリズムと深く関連していることは、「我要創辦台灣第一,世界第一個台灣文學系!你要背負十字架;規劃成立台灣文學系,傳承台灣文學,以重建台灣文學主體性」[真理大學台灣文學系]、「近二十年台灣主體意識的提高、社會的演變,使台灣文學日漸受到重視。本校文學院於民國90年向教育部提出申請成立「台灣文學研究所碩士班」[國立政治大學台灣文學研究所]、「本土與國際、理論與實務並重,以優良的師資和教學,多元的學術研究和活動,累積臺灣研究成果,建構臺灣主體性的文化」[國立臺灣師範大學台灣語文學系]といった発言等からも伺えるだろう。

すなわち、ここにおいても、「台湾文学」(や「台湾文化」)に関わる学問領域の形成と「台湾」というナショナル・アイデンティティを構築しようとする動きが連動していることが明確に自覚されており、後者の形成を助けるものとして「台湾文学」や「台湾文化」といった領域の構築が目指されているのである(加えてまた、ここで見逃してはならないのは、「台湾文学」や「台湾文化」という領域が研究すべき対象であると同時に、これから構築していくべき対象とも見られているということだろう)²¹。

「国民国家論」は、通常、「国民」が構造的に孕むマイナス面を露呈させる作業と行なうと同時に、ナショナル・ヒストリー、ナショナル・リテラチャー、ナショナル・カルチャーといった領域にも焦点を当て、①それらが、「国民(nation)」形成と深く関わるものであることを明らかにしつつ、その「構築性」「非自明性」を露呈させる作業を通じて、②それらを「解体」しようとする。

20 台湾で始めて「台湾文学」系を設立したのは真理大学である(一九九七年)。国立大学で「台湾大学」系を始めて設置したのは成功大学(二〇〇〇年)、また、台湾大学で「台湾文学」系が設置されたのは二〇〇四年のことである。

21 ちなみに、台湾で最初の「台湾文学史」が書かれたのは一九八七年のことであることを見ても([葉 1987])、「台湾文学(史)」というパースペクティブの形成が、つい最近始まったものであることがわかるだろう。

とすれば、実は、台湾という空間における「台湾文学」研究(及び、「台湾」ナショナリズムの進展の下、新しく形成されることになった、その他の「台湾」をめぐる研究領域)も、「国民国家論」とある部分までは認識を共有していると言えるだろう。すなわち、ナショナル・ヒストリー、ナショナル・リテラチャー、ナショナル・カルチャーといった領域が「国民」形成と深く関わるものであり、また、それらが自明なものではない歴史的構築物であるという認識において、両者は認識を同じくする。ただ、前者は、〈だからこそそれらを構築していくべきだ〉という立場を採用しようとしているのであり、その点において、両者は正反対の性格を持つことがわかるのである²²。

4. 「抵抗のナショナリズム」

さて、前節においては、「台湾」ナショナリズムや「台湾文学」「台湾文化」といったものが、台湾という空間においてどのようなものしてあるのか(あったのか)を、出来るだけ価値判断を交えずに、記述してきた。

ここで、あらためて問おう。これらを、「日本」や「日本文学」「日本文化」に対するのと同様に、「国民国家論」的な実践の対象とし、乗り越えるべき否定的な対象として措定することは果たして適切なのか。これは、一般化しつつ言い換えるならば、「台湾」ナショナリズムもその一つとして位置づけることが出来るであろう、いわゆる「抵抗のナショナリズム」或いは「民主化ナショナリズム」を、「国民国家論」的な実践の対象とし、乗り越えるべき否定的な対象として措定することは果たして適切なのか、という問いである。

22 なお、ここで補足的に指摘しておきたいのは、現在の台湾という空間における「台湾文学」の位置の問題である。本文で述べたように、「台湾文学」という領域は、台湾のアカデミックな空間においてはとてあえずその存在を確固たるものとしたと見てよいのであるが、台湾という空間全体の中で見るならば、実はその存在はまだ不確かなものである。

例えば、日本の「国語」科に当たる「國文」科だが、そこでは(大陸中国をもその版図に含むものとして想像された)「中華民国」の「文(学)」という枠組みが今でも採用されている。「台湾」ナショナリズムの進展に伴い、一九九〇年代末から「台湾」という地域で生産された「文学」(いわゆる台湾「本土」作家の文学)が収録されるようにはなったものの([松崎 2007]参照)、それらは「中華民国」「文学」の「現代文学」として収録されているのであって、「台湾文学」としてではない。

アカデミックな空間における「台湾文学」は未だ教育という場には浸透していないのであり、この点から言えば、現在の台湾という空間において、「台湾文学」というものは、「国民」化の装置としてさえも機能していない状態にあると言えるのである(ちなみに、「台湾史」の場合は事情が異なり、現在の台湾の「歴史」教育において、「台湾史」「中国史」「世界史」という三本立ての枠組みの中で、その位置を与えられている)。

既に述べたように、「国民国家論」的な実践は、〈肯定的しうるナショナリズム／否定すべきナショナリズム〉という区分をいったん白紙に戻しつつ、それら両者を成り立たせる台座としての「ナショナリズム」そのものに焦点を当てるという方法論をとることによって、それまで見えなかった、ナショナリズムが構造的に孕む問題点を明らかにすることに成功した。

例えば、ナショナリズムが構造的に他者への排除を孕むという点、また、それと連動することだが、ナショナリズムが他者とのコミュニケーションを阻害する(酒井直樹の言葉を借りてより厳密に言うならば、「他者」との間に「非共役性が予想される場面」において、「相互的な理解や透明な伝達」があらかじめ保障された共同体としての「われわれ」という回路に回収されることなく、その「非共役性を超越するための実践」＝「他者への開かれてある社会性」を構築する実践の可能性を閉ざしてしまう[酒井 1997:p.235-243])といった問題点、さらには、ナショナリズムがファシズムや帝国主義に向かう可能性を内在的に孕んでいる([Mosse1975][Anderson1983]等を参照)といった問題点だが²³、このような問題点をふまえるならば、ナショナリズムというのが我々が選択すべき「最後のもの(＝政治共同体の原理:榊注)」ではなく[高橋:1998:p. iii]、また、「解放を求めるもののゴール」にもなりえない[上野 2001:p.472]ということは認めざるを得ないだろう。

しかし、あるものを「最後のもの」＝「ゴール」としては位置づけられないということは、それが(全)否定されるべきものである、ということの意味するわけではない。

すなわち、ナショナリズムが上記のようなマイナス面を構造的に孕んでおり、その意味において、それを「最後のもの」と位置づけるのは適切ではなく、より良いオルタナティブがあればそちらに移行することが望ましいとしても、そのことにおいて、ナショナリズムの全存在を否定しようとするならば、それはまた適切な認識とは言えないだろう。

ここまでの論においては、「国民国家論」を、ナショナリズムを「乗り越えるべき」否定的な位置におこうとする立場という形でひとくりにしてきたのであるが(実際、その理論的構成のみに焦点を当てるとすれば、そうなる)、実のところ、「抵抗のナショナリズム」のような(従来、肯定し

23 あと、「文学研究」も含む研究面に焦点を当てると言うならば、ナショナリズム的な思考が自明化され内面化されてしまっている場合、対象をその思考の枠以外で「見る」可能性が閉ざされてしまうという問題点もある(もっともこれはナショナリズムだけの問題ではないが)。

うるものとされてきた)ナショナリズムに対する扱いは、「国民国家論」の立場をとる論者たちにおいても、一様ではない。

例えば、「他民族、他国家から抑圧され、民族性を抹殺されようとしている人びとの「抵抗のナショナリズム」を、支配の側のナショナリズムと等しなみに論じることができるだろうか？」[高橋 1998:p. iii] (高橋哲哉)といった発言が行なわれていること、或いは、まさに「抵抗のナショナリズム」という言説が孕む問題性を浮き彫りにしようとしている論者(李建志)においてさえ「東チモールの独立などに関しては、その「抵抗のナショナリズム」が大きく作用していたという肯定的な面もあるが…」[李建志 2007:p.33]という発言がなされていることに注目するならば(もっとも、両者は上述のような発言を行ないつつ、〈それでもやはりナショナリズムは乗り越えられるべきだ〉という立場に戻るのであるが)、「国民国家論」な語りの中でも、「抵抗のナショナリズム」は一概に否定し切れない存在としてあることがわかる²⁴。

こういった発言をふまえ、かつ前節で行なった「台湾」ナショナリズムに関する整理をもふまえた上で言うならば、ナショナリズムに対して我々がとるべきは、その存在を一挙に「否定」してしまうことではなく、それが「近代が産んだ他の多くの概念同様、文脈に応じて異なるあらわれ方や効果を持」[上野 2001:p.472-473]ってきたものであることを押さえつつ(その中には「肯定的」とみなしうるような「効果」も当然含まれる)、その中に孕まれる問題点を「批判」していく、という態度であるように思われる(「否定」と「批判」の相違については、注9を参照)。

もちろん、ナショナリズムというものが我々のとるべき「最後のもの」ではない以上、ナショナリズムを「否定」していくような知的実践のあり方を否定するわけではないが、そのような実践は、ナショナリズムに代わるオルタナティブを模索し、提示しようとする作業を伴わない限り、実質的には、現状に対する「空想的」な否定でしかなくなってしまうことにも注意すべきだろう。

①「相互的な理解や透明な伝達」があらかじめ保障された共同体としての「われわれ」という回路に回収されることない、「非共役」的な「他者」との間のつながり[酒井 1997:p.235-243]は、

24 あわせて、基本的には反ナショナリズムの立場をとるE・サイドが行なった、以下のような発言も紹介しておこう。「組織化された政治活動としてのナショナリズム——共同体の復権、アイデンティティの主張、新しい文化的実践の台頭——が非ヨーロッパ世界のいたるところで西洋の支配に対する抵抗(=「不当な仕打ちと彼らがみなすもの」への「抵抗」; 榊注)を刺激し推進してきたことは歴史的事実である。…私たちはまたナショナリズムによる抵抗運動のなかでたたかわされてきた知的・文化的議論を無視してはなるまい。すなわち、ひとたび独立を達成したら、古い正統思想と不正に後戻りしないためにも、社会と文化をあらたに想像的に考えなおさねばならないという議論を。」[Said 1993:p.48-49(2)]

いったいどのようなものとしてありうるのか²⁵。そして、②そのようなつながりに基づいた「(政治)共同体」(或いは「集団性」といっても良い)を、我々はどのような形で想定しうるのか。或いは、③他者の排除を伴わない「(政治)共同体」は、いかなる形においてありうるのか。

管見の限り、「国民国家論」の可能性を最も理論的につきつめようとしている論者である酒井直樹は、J=L・ナンシーの「無関係の関係」という考え方を適用しつつ、「同時的な共同体」=「われわれ」という概念を提唱することでナショナリズムにかわるオルタナティブを提示しようとしているし[酒井 1997]、また、一九九〇年代以降の日本の知識人界において大きな論点となっている、「公共性」をめぐる議論も、同様な文脈に位置づけることが出来ると思われるのだが、「国民国家論」が、「文学」その他の「研究」対象を分析／記述するための方法論にとどまらず、社会を変革しようとする知的実践としても自らを位置づけようとするならば、以上のような先行実践をふまえつつ、オルタナティブを模索していく知的作業を、必須のものとして行なっていく必要があると思われる。

さて、以上述べてきたことをふまえて、本節の最初に挙げた問いに対する本論の答えを出すならば、以下になるだろう。

「日本」や「日本文学」「日本文化」に対するのと同様、「台湾」ナショナリズムを、「国民国家論」的な実践の対象とし、乗り越えるべき否定的な対象として措定することは、それが「肯定的」とみなしうる機能を持ってきた——そして現在も持ち続けている——以上、適切でない。ただし、それは、「台湾」ナショナリズムというものを全肯定すべきものとして措定することなく(そのような態度は、前者のような態度を裏返したに過ぎず、対象とするナショナリズムをその具体性において見ようとしな——すなわち、「文脈に応じて異なるあらわれ方や効果を持つ」ものとして見ようとしな——という点において、前者と同じく、適切とは言えない)、それを相対化しつつ「批判」する姿勢は、当然ながら持つ必要があるだろう²⁶。

25 この①の問いに関わる考察を行なったものとして、[酒井 1997]がある。その他、[中山 2000:p.35-51]も、「“日本人”の枠組み自体を曖昧化しながらも、完全に外国人と一致するに至らない密輸ルート」「予め交換レートが決められていない局面でなされる密輸」といった形で、このような「つながり」の可能性を提示しようとしているものとして注目される。

26 誤解を避けるために補足しておくが、筆者は、「日本」や「日本文学」「日本文化」、あるいは「日本」におけるナショナリズムならば「否定」すべきマイナスの位置に措定されるのが当然である、と考えているわけではない。これまでの考察を読んで頂けたならば明らかだと思うが、「日本」におけるナショナリ

第2節において、西川長夫の言葉を借りつつ、「国民国家論」を、国民国家を対象化し、その有り様を明らかにしようとするというだけではなく(①)、「国民国家」を「乗り越えるべき」もの、解体すべきもの—そしてその意味でいわば「否定」的な対象—として位置づけようとする志向性を孕む(②)ものとしてとらえたわけだが、仮に①の側面だけでも「国民国家論」足りうるととらえ直すならば、言い換えれば、「文脈に応じて異なるあらわれ方や効果を持つ」ものとして現実に存在する「国民国家」を相対化し、それを「批判」しうる(そしてそれをより適切な方向に修正していく)可能性を切り開いていく、という性格のみにおいても「国民国家論」と言いうるのであれば、「台湾」ナショナリズムに対してもその実践は当然差し向けられるべき、と本論は考える。

5. 終わりに

以上で、台湾の日本語教育の中の日本文学教育に「国民国家論」的な知的実践を導入することに関する考察は終了であり、今回、筆者が述べたかったことは全て述べ終えたと言ってよい。

ただ、ここまで本論を読んで頂いた方々からおそらく投げかけられるだろう問い、すなわち、〈では、結局のところ、おまえは、台湾における日本文学教育がどのようなものとしてあるべきだと考えているのか〉という問いに何らかの答えを出す義務はあるだろうし、また、台湾の大学の日本語学科に勤務する者として、筆者もまた将来、日本文学関連の授業を担当する可能性がないわけではないことをも考えるならば²⁷、台湾で日本文学教育をどのように行なったらよいのかということに関して、何らかのポジティブな提言を行なっておくことは意味があるだろう。わずかではあるが、私見を述べておこう。

まず、今回、本論が焦点を当てた「国民国家論」の導入についてだが、(「日本」の「日本文学」研究業界を中心として行なわれている)現在の「日本文学」研究が「国民国家論」的实践

ズムについても、「文脈に応じて異なるあらわれ方や効果を持つ」ものとしてとらえるべきだ、というのが本論の立場である。

27 筆者が勤務する南台科技大学応用日語系[所]、大学部においては「日本文学」関連の授業を設置していないのだが、大学院においては、「日本近現代文学研究」「中日比較文学」という二つの「日本文学」関連の科目を設置している。

を既に取り入れ、それが一定の成果を挙げて来ていることを考えるならば、それを無視する形で「日本文学」を教えていこうとするのは現実的ではなく、従って、台湾における日本文学教育においても、何らかの形で「国民国家論」的实践を取り入れる(或いは、少なくともそれを意識した教育のあり方を考えていく)必要があると思われる。

ただ、今回指摘したように、そこで注意しなければならないのは、台湾という空間において「国民国家論」的实践を行なえば、結果的に、「台湾文学」や「台湾」をもその実践の対象として措定することになる、ということであり、もし「国民国家論」を導入する形で「日本文学」の授業を行なうとするならば、そのような副次的な効果を明確に意識しつつ、授業設計をしていく必要があるだろう。今の筆者にその具体的プランがあるわけではないのだが、少なくとも、ナショナルなもの＝「否定」すべきものということを前提とする(＝「常識」としてしまう)ような語りは避けるべきだろうし、仮にナショナルなものを「批判」的な位置に置くにしても、何故、或いは、どこが「批判」されるのか、ということを具体的な文脈に沿った形で示すような作業を伴う形で行なわれるべきだと思われる。

それから、日本文学教育の中で重要な位置を占めている「日本文学史」について補足的に述べておくならば、筆者は、オーソドックスな「日本文学史」(＝「日本文学」のカノンの集積たる「日本文学史」)を台湾の日本語文学教育の中で教えるということには、プラグマティックなレベルでの意味があると考え、「日本文学」という範疇において語られる数多くの事象が、何の体系化も施こされない、互いに無関係な形で置かれていたとすれば、それらを学ぶのは一挙に困難になる、と考えられるからだ。それが、ナショナルな眼差しに基づく一つの「歴史＝物語」に過ぎず、後に別の形でそれを相対化していくような授業実践を行なうことになるにしても、「日本文学」という範疇において語られる数多くの事象をとりあえず「全体的」に理解するためのいわば地図のようなものとして、「(日本)文学史」を利用する意味はあるのではないか、というのが、筆者の考えである。

では、以上のような認識をふまえた上で、どのように具体的な「日本文学」の授業プランを作っていくのか。それは、今後の筆者における実践的な課題とすることにして、今回はこれで稿を閉じることにしたい。

(Sakaki Yuichi 南台科技大学応用日語系)

引用・参考文献

(中国語名については日本語音読みにした上で、アルファベット順に並べた。日本語訳があるものはそちらを参照(引用頁も日本語訳のもの)。website上の文献については、全て二〇一二年一月二九日時点のものである)

- Anderson, Benedict (1983) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso, 1983, London (白石隆・白石さや訳、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と遡行—』、1987年12月、リプロポート、日本)
- 陳光興(1994)「帝國之眼:「次」帝國與國族—國家的文化想像」:『台灣社會研究季刊』、17、1994年7月、台湾(坂本ひろ子訳、「帝國の眼差し—「準」帝國とネーション-ステイトの文化的想像」:『思想』、859、1996年1月、岩波書店、日本)
- 中華民國憲法 日本語訳、台北駐日経済代表処代表 website、<http://www.roc-taiwan.org/Jp/lp.asp?ctNo=3259&CtUnit=246&BaseDSD=7&mp=202>
- 浜本純逸(2001)『文学教育の歩みと理論』、2001年3月、東洋館出版社、日本
- 本多周爾(2010)『台湾—メディア・政治・アイデンティティ—』、2010年4月、春風社、日本
- 彭百顯(1995)「文學院應限期設立台灣文學系」:『自立早報』、1995年5月31日、台湾 →[羊 2011]
- 何義麟(2003)『二・二八事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス—』、2003年3月、東京大学出版会、日本
- 河添恵子(2004)『台湾新潮流—ナショナリズムの現状と行方—』、2004年2月、双風社
- 萱野稔人(2011)『ナショナリズムは悪なのか』、2011年10月、NHK出版、日本
- 國立編譯館(1997)『國民中學 認識台灣(歴史編)』、1997年8月、國立編譯館、台湾(蔡易達・永山英樹訳、『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』、2000年3月、雄山閣出版、日本)
- 國立政治大學台灣文學研究所「単位紹介 台灣文學研究所」、國立政治大學 website、<http://units.nccu.edu.tw/server/publichtmlmut/html/w159/cw159.html>、台湾
- 國立臺灣師範大學台灣語文學系「特色發展」:國立臺灣師範大學台灣語文學系 website、<http://www.ntnu.edu.tw/TCLL/new/introduction.php?pages=3>、台湾、
- 小森陽一・高橋哲哉編(1988)『ナショナル・ヒストリーを超えて』、1988年5月、東京大学出版会、日本
- 小森陽一他編(2003)『岩波講座文学 13 ネーションを超えて』、2003年3月、岩波書店、日本
- 小坂井敏晶(2002)『民族という虚構』、2002年10月、東京大学出版会、日本
- 黄俊傑(2007)『台灣意識與台灣文化』、2007年、台湾大学出版中心、台湾(臼井進訳、『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史的変遷—』、2008年12月、東方書店、日本)
- 丸川哲史(2010)『台湾ナショナリズム—東アジア近代のアポリアー—』、2010年5月、講談社、日本
- 松崎寛子(2007)「台湾高校教科書における台湾文学」(2007年度財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援事業報告書):財団法人交流協会 website、台湾
- 民主進歩党政策白皮書編纂工作小組(1993)『多元融合的族群關係與文化—民主進歩党的族群與文化政策』、1993、民主党中央本部、台湾、p.79 ※[若林 2008:p.335-336]に引用されているものを参照。
- Mosse, George L. (1975) *THE NATIONALIZATION OF THE MASSES*. Howard Fertig, New York, 1975 (佐藤卓己・佐藤弥寿子訳、『大衆の国民化—ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化—』、1994年2月、柏書房、日本)
- 中山昭彦(2000)「裸体画・裸体・日本人—明治期〈裸体画論争〉第一幕—」:金子明雄他編、『ディスクールの帝国—明治三〇年代の文化研究—』、2000年4月、新曜社、日本
- 南台科技大學應用日語(学)系(2008) 2008年國際學術研討會籌備委員會(文責:山藤夏郎・榊祐一)、「(舉辦宗旨)應用日語系(所)は教育と産業界をいかに架橋するか」:『南台科技大學應用日語系(所)2008年國際學術研討會論文集』、2008年11月1日、南台科技大學應用日語系(所)、台湾
- 西川長夫(1995)『地球時代の民族—文化理論—脱「国民文化」のために』、1995年10月、新曜社、日本

- 同(1998)『国民国家論の射程—あるいは〈国民〉という怪物について—』、1998年4月、柏書房、台湾
- 同(2001)『増補 国境の越え方—国民国家論序説—』、2001年2月、筑摩書房、日本 ※原本は1992年1月刊行(書名は『国境の越え方—比較文化論序説—』)
- 王甫昌(2003)『當代台灣社會的族群想像』、2003年12月、群學出版、台湾
- Renan, Joseph Ernest(1882) Qu'est-ce qu'une nation?.(鶴飼哲訳、「国民とは何か」:E・ルナン他、『国民とは何か』、1997年10月、インスクリプト、日本)
- 林長河(1997)「専門分野を持つ大学日本語学科におけるカリキュラム—銘伝管理学院の「應用日語學系」を例に—」:『銘傳學刊』、8、1997年8月、銘傳大學、台湾
- 李建志(2007)『朝鮮近代文学とナショナリズム—「抵抗のナショナリズム」批判—』、2007年9月、作品社、日本
- 李天鐸・何慧雯(2003)「我以前一定是個日本?—日本流行文化的消費與認同實踐—」:『媒介擬想JOK2 日本流行文化在台灣與亞洲(II)』、2、2003年、台湾
- 李登輝(1998)「光復(祖國復歸)五十三周年記念談話」:『中央日報』、1998年10月25日 ※「新台湾人とは何か」:台北駐日經濟代表處代表 website(http://www.taiwanembassy.org/ct.asp?Item=62850&ctNode=3591&mp=202&xq_xCat=issue&nowPage=3&pagesize=15)に転載されているものを参照。
- Said, Edward W.(1993) CULTURE AND IMPERIALISM. Alfred A. Knopf, 1993, New York(大橋洋一訳『文化と帝国主義』1・2、1:1998年12月/2:2001年7月、みすず書房)
- 蔡茂豊(2001)「応用日本語学科のカリキュラムについて」:『銘傳日本語教育』、4、2001年5月、銘傳大學應用語文學院應用日語學系、台湾
- 酒井直樹・ブレード・ド・バリー・伊豫谷登士翁編(1996)『ナショナリティの脱構築』、1996年2月、柏書房、日本
- 同(1997)「多言語主義と多数性—同時的な共同性をめざして—」:三浦信孝編、『多言語主義とは何か』、1997年5月、藤原書店、日本
- 笹沼俊暁(2011)「『日本文学史』を解体する『日本文学史』の授業は可能か—東海大学・慈濟大學での試みを例に—」:『東海大學日本語文學系學術研討會「日本文學教育教材台灣—實施現狀與面臨的課題」會議論文集』、2011年6月、東海大學日本語文學系、台湾
- 真理大學台灣文學系「本系沿革」:真理大學台灣文學系 website、<http://mttl.mtwww.mt.au.edu.tw/ezcatfiles/b016/img/img/123/901118075.mht>、台湾
- 周明德〔整理〕(1997)「讓學術的回歸學術—國中『認識台灣』教科書内容是否妥当公聽會」:『海峽評論』、80、1997年6月3日、台湾、p.18-19 ※[山崎 2009:p.203]に引用されている日本語訳を参照。
- 高橋哲也(1998)「まえがき」:[小森・高橋 1988]
- 上野千鶴子(2001)「解説—「国民国家」論の功と罪—ポスト国民国家の時代に『国境の越え方』を再読する」:[西川 2001]
- 内田康(2004)「〈外「国文学」〉としての日本文学」:『アジア遊学』、69、2004年11月、勉誠出版、日本
- 若林正文(1985)『海峽—台湾政治への視座—』、1985年10月、研文出版
- 同(1992)『東アジアの国家と社会 2 台湾—分裂国家と民主化—』、1992年10月、東京大学出版会、日本
- 同(2003)「現代台湾における台湾ナショナリズムの展開とその現在的帰結—台湾政治觀察の新たな課題—」:『日本台湾学会報』5、2003年5月、日本
- 同(2008)『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史—』、2008年6月、東京大学出版会、日本
- 山崎直也(2009)『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』、2009年2月、東信堂、日本
- 吉田勝次(2005)『自由の苦い味—台湾民主主義と市民のイニシアティブ—』、2005年3月、日本評論社、日本
- 葉石濤(1987)『臺灣文學史綱』、1987年、文學界雜誌、台湾
- 羊子喬(2011)『台灣主體的建構—台灣文學系所誕生—』、2011年8月、春暉出版社、台湾
- 財団法人交流協会(2009)「2009年度 台湾における日本語教育事情調査 報告書」:財団法人交流協会日本語センターwebsite、http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/06/ED97926AA7BC824649256F430025B77D?OpenDocument